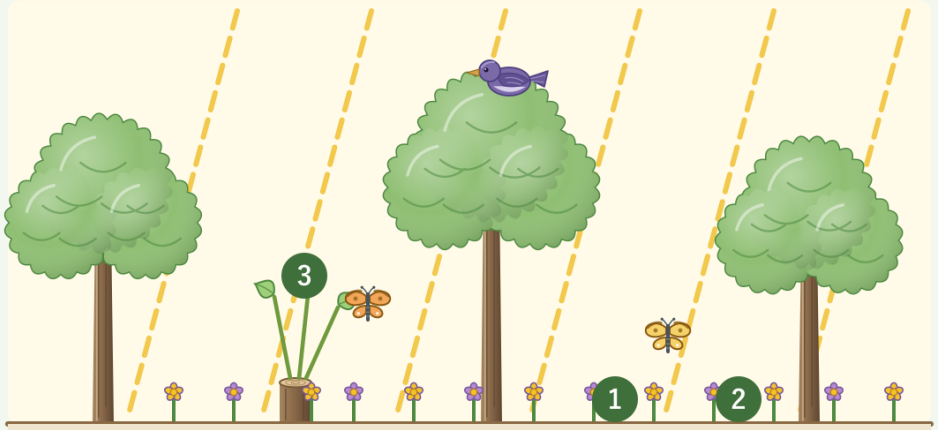
人が手を入れて保たれる里山の生き物

雑木林やため池は、人が手を入れると、なぜ多くの生物がすめるのだろう

A 手入れが続く雑木林



手入れ： ① 下草をかる　② 落ち葉をかく（肥料に使う）
③ 木を切り、切り株から芽を出させる

→ 林の中まで光が届き、背の低い草花が育つ。

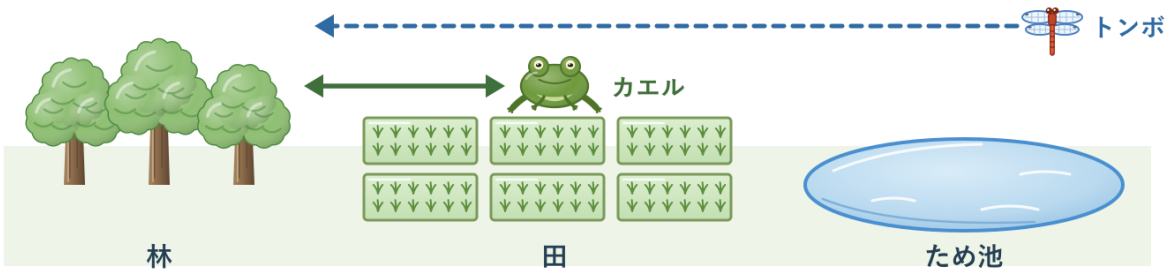
B 手入れをやめた雑木林



ササや背の高い木がしげり、林の中が暗くなる。

→ 明るい所を好む草花や、それを利用する昆虫などが減る。

里山のつながり（林・田・ため池）



林・田・ため池がつながり、場所を行き来する生物も多い。
カエル：田やため池で卵を産み、林でもくらす。
トンボ：幼虫（ヤゴ）は水の中、成虫は林のまわりでもくらす。

以前は、落ち葉は田畑の肥料に、切った木はまきや炭に使われ、人のくらしと手入れが結びついていた。

※ 模式図。生物の種類や数は例で、林のようすは地域によって違う。